

『上海新報』に見る幕末官船千歳丸の上海来航

松浦 章

一 緒言

幕末に徳川幕府は海外に向けて積極的に船を派遣したが、その一船が文久二年（同治元、1862）四月に長崎から上海に向けて派遣した官船千歳丸である。²

この千歳丸には幕末・明治に活躍した高杉晋作や五代友厚等が搭乗していた。清朝は1842年の南京条約締結以降上海・寧波・福州・厦門・廣州等五港を対外開放した。千歳丸が訪れた五港の内の上海は中国の外国貿易の拠点になっていた。千歳丸の乗員達は上海の繁栄ぶりを眼に焼き付け、清朝中国に対する新たな印象を持ち³、また様々な感慨を持ち帰国したのであった。

¹ 「続通信全覽類輯之部 船艦門、商船発遣、「箱館亀田丸魯領アンムル河へ發航一件」「長崎千歳丸上海へ發航一件」「箱館健順丸上海へ發航一件」「箱館健順丸香港及荷蘭領バタビヤ發航一件」、外務省編纂『続通信全覽』類輯之部二九、雄松堂出版、1987年3月、705~737頁。本庄栄治郎『増補幕末の新政策』有斐閣、1958年8月、422~481頁。

² 千歳丸上海派遣に関しては後述のように多くの成果があるが、派遣を中心とする研究で最近で尤もまとまった成果は、春名徹氏の「一八六二年幕府千歳丸の上海派遣」（田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館、1987年4月、555~601頁）である。さらに馮天瑜『“千歳丸”上海行——日本人1862年の中国観察』（商務印書館、2001年10月）の考察部分（1~304頁）と乗員の上海紀行文の漢訳部分（305~465頁）から成る成果が平行された。馮氏の著書については沈国威教授より教示を得た。記して謝意を表する次第である。

³ 千歳丸の乗員等に関する研究は後述のように多い。その中国観に関する成果としては次のものがある。

○杜氏嘉造（森鹿三）「太平天国とわが遣清使節」『東洋史研究』第7巻第5号、1942年10月、67頁。

○市古宙三「幕末日本人の太平天国に関する知識」『開国百年記念明治文化史論集』1942年11月、481~486頁。

○増井経夫『太平天国』岩波新書、1951年。同『中国の二つの悲劇』研文出版、1978年。

○佐藤三郎「文久二年に於ける幕府貿易船千歳丸の上海派遣について——近代日中交渉史上の一齣として——」『山形大学紀要人文科学』第7巻第3号、1972年1月、31~57頁。

○増田渉『西学東漸と中国事情——「雑書」札記——』岩波書店、1979年2月、178~179頁。

○増田渉『雑書雑談』汲古書院、1983年3月、30~31、100、108~109、131頁。

○日比野丈夫「幕末日本における中国観の変化」『大手前女子大学論集』第20号、1986年、1~20頁。

○平岩昭三『遊清五録』とその周辺——幕府交易船千歳丸の上海渡航をめぐる——『日本大学芸術学部

この千歳丸乗船一行の上海での行動の一端が当時上海で発行されていた新聞『上海新報』に掲載されている。彼等も上海滞在中に『上海新報』を閲読していたことが知られる。

『上海新報』は咸豊十年(1861)十一月に上海で創刊され、イギリス商字林洋行が発行していた。初期は週刊であったが、1862年4月9日に兩日刊に変更され、1872年5月27日より日刊となって同年の12月2日の停刊まで発行されていた。主筆はM.F.Wood 中国名:伍德、J.Fryer 中国名:傅蘭雅、Yong J. Allenn 中国名:林樂知等であった。記事の多くは外国新聞からの翻訳を掲載したが、太平天国の動向に関する有用な記事を掲載している。⁴とりわけ太平天国の江南地域における動向を知りうる極めて重要な記事を多く掲載したのであった。⁵また既に拙稿⁶で紹介したように『上海新報』は1860年代の重要な情報源である。

そこで本稿は、1862年6月初めより7月末まで上海に滞在した徳川幕府の官船千歳丸の乗員と、当時上海で発行されていた新聞『上海新報』との関わりについて述べてみたい。

二 幕末官船千歳丸の上海来航

幕末に徳川幕府が、通商と海外情報の収集の目的をもって上海に千歳丸を派遣するが、この千歳丸に関する史料として後述のようにこれまでにいくつものものが知られる。そこで千歳丸上海派遣の概要を簡単に述べたい。千歳丸の上海派遣に関して『維新史料綱要』巻四、文久二年四月二十九日の条に、

幕府、貿易視察ノ為、勘定方根立助七郎・長崎奉行支配調役並沼間平六郎・和蘭小通詞岩瀬彌四郎・唐小通事周恒十郎・同蔡善太郎等ヲ上海清國に派遣ス。会津藩士林三郎・佐賀藩士納富介次郎・同深川長右衛門・同山崎卯兵衛・同中牟田倉之助武臣・名古屋藩士日比野掬次・濱松藩士名倉予何人・徳島藩士櫻木源藏・萩藩士高杉晋作春風・大村藩士峯源藏・鹿児島藩士五代才助友厚等、藩命ヲ以テ之ニ随ヒ、英國海員「ヘンリー・リチャードソン」Henry Richardson 外十三名及蘭人「トン

紀要』第16号、1987年3月、14~35頁。

○王曉秋『近代中日啓示録』北京出版社、1987年10月、63~67頁。

○王曉秋『近代中日關係史研究』中国社会科学出版社、1997年7月、173~178頁。

○王曉秋『近代中日文化交流史』中華書局、2000年8月、109~125頁。

○春名徹「中牟田倉之助の上海体験——『文久二年上海行日記』を中心に」『國學院大學紀要』第35巻、1997年3月、57~96頁。同論文には「中牟田倉之助上海行日記」(67~96頁)が翻刻掲載されている。

○馮天瑜「日本幕府使団所見1862年之上海」『近代史研究』1999年第3期(5月)、183~212頁。馮天瑜「千歳丸」の上海行——日本幕末期の中国觀察を評論す』『中国21』(愛知大学現代中国学会)Vol.7、1999年11月、169~198頁。前掲注2 馮天瑜著書参照。

○内田慶市『近代における東西言語文化接触の研究』関西大学出版部、2001年10月、105~115頁。

⁴ 王松林、朱漢国主編『中国報刊辞典(1815—1949)』書海出版社、1992年6月、3~4頁。

⁵ 上海図書館『《上海新報》中の太平天国史料』1964年11月、史料212頁、附録20頁同書「史料」は1862年6月24日~1866年7月2日までの太平天国に関する記事を収録している。

⁶ 松浦章「『上海新報』に見る琉球國記事」『南島史学』第53号、1999年7月、32~45頁。

ブリング、航海・商法ノ用ヲ辦ズル為、雇傭セラレテ同乗ス。是日、一行ノ乗船千歳丸帆船原名「アルミステス」長崎ヲ解纜ス。⁷

とあり、文久二年四月二十九日（1862年5月27日）に、徳川幕府の外国貿易視察の目的をもって千歳丸は長崎を出港した。そして、同書の七月十五日の条に、

勘定方根立助七郎等、上海清國ヲ發シ、是日、長崎港ニ歸著ス。⁸

とあるように、千歳丸は七月十五日（1862年8月10日）に長崎に帰航した。二箇月半の全日程であった。千歳丸の旧名アルミステス Amistice の1860年10月から1862年4月までの航海記録は沖田一氏が解明されている。⁹ 同船はそれによれば上海・長崎間の貿易に従事していた。

千歳丸に乗船していた人々は幕命、藩命をおびていたため多くの記録が残されている。千歳丸関係者の記録に関して最初に詳細に調査した沖田一氏が「幕府第一次上海派遣官船千歳丸の史料」上、下¹⁰として当時知られる全容を紹介された。その後、千歳丸上海派遣に関係する資料が小島晋治氏監修の「幕末明治中国見聞録集成」に収められているが、それも含め関係史料を若干述べてみたい。

千歳丸の上海航行に関する資料を最初に使用したものと思われる成果は明治時代の海軍中將となった中牟田倉之助の伝記であろう。中牟田の伝記作成の過程で中村孝也氏が使用されたものである。『中牟田倉之助傳』第十三 上海渡航（その一）、第十四 上海渡航（その二）¹¹の中で、幕府の「御小人目付 鹽澤彦次郎」の従者として千歳丸に乗船した中牟田の「上海行日記」等が抜粋引用されている。

千歳丸に乗船し上海へ渡った高杉晋作の記録に「遊清五録」がある。これは「航海日録」「上海掩留録」「外情探索録」「内情探索録」「崎陽雜録」からなり『東行先生遺文』下巻¹²に収録されている。なおこの「遊清五録」の一部は『五代友厚伝記資料』¹³にも収録されている。

千歳丸に乗船した中に、長崎の五箇所割符仲間の松田屋伴吉もいた。彼の記録に「唐國渡海日記」がある。その一部が川島元次郎氏の『南國史話』の第七「最初に試みた上海貿易」¹⁴に収録されている。

⁷ 東京大学史料編纂所蔵版『維新史料綱要』巻四、東京大学出版会、1937年9月初版、1966年8月覆刻、60頁。

⁸ 『維新史料綱要』第四巻、112頁。

⁹ 沖田一「幕府第一次上海派遣官船千歳丸の史料」下、『東洋史研究』第十巻第三号、60～61頁、1948年7月。

¹⁰ 沖田一「幕府第一次上海派遣官船千歳丸の史料」上、下、『東洋史研究』第十巻第一号、48～58頁、同第十巻第三号、58～72頁。1947年12月、1948年7月。沖田氏は、この論文で、当時の研究成果も含め全部で43件の成果・史料を紹介している。

¹¹ 中村孝也『中牟田倉之助傳』中牟田武信発行、1919年11月、209～267、附録6～7頁。

¹² 『東行先生遺文』下巻、民友社、1926年5月、72～124頁。奈良本辰也監修 堀哲三郎編集『高杉晋作全集』下、新人物往来社、1974年5月、141～216頁。

¹³ 日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』東洋経済新報社、1974年11月、5～6頁。

¹⁴ 川島元次郎『南國史話』平凡社、1926年5月、115～166頁。

東方学術協会より刊行された『文久二年上海日記』¹⁵がある。これには千歳丸に乗船して上海へ赴いた納富介次郎の「上海雑記」と日比野輝寛の「贅状録」と「没鼻筆記」が収録されている。

「續通信全覽」より収録された本庄栄治郎氏の『幕末貿易史料』の「長崎千歳丸上海へ発航一件」¹⁶が長崎奉行から勘定奉行への照会と航海日記を収めている。

千歳丸に乗船した濱松藩士の名倉予何人の記録に関しては田中正俊氏の研究がある。¹⁷

千歳丸の上海航海を研究したものとしては、本庄栄治郎氏の「千歳丸の上海貿易」¹⁸があり、千歳丸の上海航行、上海における見聞や貿易、貿易の意義等について考察を加えている。さらに「上海貿易に関する支那側の史料」¹⁹において、千歳丸の上海航行に関しては『清史稿』巻一五八、邦交六、日本の条に記された次の記事を掲げるに止まっている。

同治元年、長崎奉行乃遣人至上海、請設領事理其國商稅事。通商大臣薛煥不許。²⁰
とあり、同治元年は日本の文久二年に当たるから、本庄氏が指摘されたように、この記事は千歳丸の上海来航に関する中国側の記事であることは確かである。

千歳丸の長崎出港から上海来航そして長崎帰航までの経緯を上記諸資料によって簡単にまとめれば次ぎようになる。

文久二年四月二十九日 同治元年四月二十九日 (1862年5月27日) 千歳丸長崎出帆す。

五月六日 同治元年五月七日 (1862年6月2日) 千歳丸上海入港す。

五月八日 同治元年五月九日 (1862年6月4日) 上海道台を訪問す。

日比野輝寛の「贅状録」上、五月八日条に、「コノ道臺ト云フハ重官ニテ分巡蘇松太兵備兼管水利事務ニテ、位ハ従二位、姓ハ呉、名ハ煦ト云フ。コノ人浙江錢塘縣ノ人ナリ。養廉八年二銀三千兩ノヨシ。」²¹とある。上海道台とは分巡蘇松太兵備道の呉煦であった。

七月五日 同治元年七月五日 (1862年7月31日) 千歳丸上海出港す。

七月十五日 同治元年七月十五日 (1862年8月10日) 千歳丸長崎帰着す。

千歳丸一行が上海に来航し、帰国するまでの二ヶ月は日本の暦では文久二年であり、中国の暦では同治元年のことである。そこで西暦を加え三暦対照表を掲げたい。

¹⁵ 東方学術協会『文久二年上海日記』全国書房、1946年5月、165頁。

¹⁶ 本庄栄治郎編『幕末貿易史料』清文堂出版、1970年8月、12～16頁。

¹⁷ 田中正俊「名倉予何人(文久二年)支那聞見録について」『山本博士還暦記念東洋史論叢』山川出版社、1972年、291～304頁。

¹⁸ 本庄栄治郎『増補幕末の新政策』有斐閣、1958年8月、447～469頁。

¹⁹ 『増補幕末の新政策』472～474頁。

²⁰ 『清史稿』(中華書局本)16冊、4618頁。

²¹ 『文久二年上海日記』59頁。

西 暦	日 本 暦	中 国 暦
1862年4月29日	文久二年四月癸丑（一日）（大月）	同治元年四月癸丑（一日）（小月）
1862年5月29日	文久二年五月癸未（一日）（小月）	同治元年五月壬午（二日）（大月）
1862年6月27日	文久二年六月壬子（一日）（大月）	同治元年六月壬子（一日）（大月）
1862年7月27日	文久二年七月壬午（一日）（小月）	同治元年七月壬午（一日）（小月）

千歳丸が上海に入港した上海側の記録として上海で刊行されていたノースチャイナ・ヘラルド（The North-China Herald）の記録から見たい。

千歳丸入港は同紙の619号“Shipping Intelligence Arrivals”に、

Date. June 2 / Vessels Sen-Zai-Maroo / Flag & Rig. Jap. Bk. / Tons. 350 /

Captain Richardson / From Nagasaki / Sailed May 27 / Cargo General /

Consignees T. Kroes and Co.²²

とあり、6月2日に上海に入港した千歳丸は「セナーザイマロ」、即ちセンザイマルとして登録された。日本のパーク型帆船であった。350トンで船長はリチャードソンであった。長崎を5月27日に出港してきた。積み荷は一般貨物で、荷主はT. Kroes会社であった。

その後、同紙619号92頁の“Shipping in harbour and at Woosung”に、呉淞江に停泊する船名として、

Vessels Sen-Zai-Maroo / Date.of Arrival June 2 / Flag & Rig. Jap. Bk. / Tons. 350 /

Captain Richardson / Consignees T. Kroes and Co.

とあり、そして、ノースチャイナ・ヘラルドの620号（June 14,p.96）、621号（June 21,p.100）、622号（June 28,掲載無し）、623号（July 5,p.108）、624号（July 12,p.112）までの“Shipping in harbour and at Woosung”には、

Vessels Sen-Zai-Maroo / Date.of Arrival June 2 / Flag & Rig. Jap. Bk. / Tons. 350 /

Captain Noemama / Consignees T. Kroes and Co.

とあり、船長がリチャードソンからノエママ Noemama に替わっている。

さらに、625号（July 19,p.116）、626号（July 26,p.120）、627号（August 2,p.124）の“Shipping in harbour and at Woosung”には、

Vessels Sen-Zai-Maroo / Date.of Arrival June 2 / Flag & Rig. Jap. Bk. / Tons. 350 /

Captain Noemama / Consignees T. Kroes and Co / Destination Nagasaki /

Intended despatch Early

とあって、千歳丸が長崎に向けて近々か出港することが予告されている。

千歳丸が上海を帰帆した後に刊行されたノースチャイナ・ヘラルド628号“Shipping Intelligence Departures”には次のように記している。

Date. July 31 / Vessels Sen-Zai-Maroo / Flag & Rig. Jap. Bk. / Tons. 350 /

Captain Noemama / Destination Nagasaki / Cargo Sun., &c. /

²² The North-China Herald, No. 619, June 7, 1862, p.92.

Despatched by T. Kroes and Co.²³

とあり、7月31日に上海を出港し長崎に向かったが、船長はノエママであった。

三 『上海新報』に見る幕末官船千歳丸の上海来航

千歳丸一行が上海に到着した時期は、太平天国軍が上海近郊に迫っていた時期であったが、千歳丸の上海来航は上海在住の外国商人にとっても極めて興味深い関心事であった。上海のノースチャイナ・ヘラルド (The North-China Herald) No.619、7月7日号²⁴はつぎのように報じている。本記事の英文の原文は既に沖田氏の研究において紹介されている。²⁵ 次に『外国新聞に見る日本』より全訳文を掲げてみる

日本は目下、商業界にとって興味ある光景を呈しているが、これはこの進歩の時代に即した動きと言えよう。ここ数日の間に日本の国旗を掲げたイギリス製の船舶が上海に入港したということ自体、注目に値することだが、日本政府がこの船を購入したばかりでなく、貿易を目的として自国の産物および製品を積載していると分かるや、この事件は、あの特異な国民の排外的な国策に全く新しい光を投げかけることになった。われわれがこれまで聞き及んだところによると、かの帝国を専制的に支配している大君、ヤクニン、大名は対外通商の促進に反対しているのみならず、商業や海運に従事している人々を軽蔑しているということだった。それを事実だとする見方が大勢を占め、しかも日本と通商条約を結んでいる列強諸国の代表たちもその例外ではなかったことから、こうした事情は、外国国民向けの日本政府のヤクニンと交渉する際の手引きとなる地方規定を作成する作業にまで大きな影を落としていた。この見解——正直なイギリス商人には、極めて不快なものだった——を是認し、それによって日本におけるわが国の商業的な立場を不利なものとしたのは、かつての江戸駐在イギリス公使、オールコック氏だという批判が、今日までの一貫した声である。それによって、進取の気象に富む商人とイギリス公使館のメンバーの間に広い境界線が汚かれたというわけだ。

外交官や旅行者が皮相な観察にもとづいて引き出した、日本の体制に対する過去の多くの結論と同じように、この見解は、もし政府をその行動から判断するなら、最も誤った見解の1つである。外国列強が、日本列島で対外貿易の門戸を開放させるためにその外交的手腕のすべてを投入している間に——各国は独占的特権を求めて競いあっていた——日本政府の抜け目のない役人たちは、大君の承認のもとに対外貿易から得られる利益の最大の部分を確保することに全力を尽くす決意を固めていたのだ。彼らは、外国人が、彼らの国の製品と産物で、世界中で自由に貿易を行うことで自分たちより多くの利益を上げていることを理解した。そして、商売人の鋭い目で、

²³ The North-China Herald, No. 628, August 9, 1862, p128.

²⁴ The North-China Herald, No. 619, June 7, 1862, p90.

²⁵ 沖田一「幕府第一次上海派遣官船千歳丸の史料 (下)」61～65頁。

自国の製品を売って現在自分たちが得ているよりも多くの利潤を上げる方法を考え出したのである。

この自由貿易という世界主義的精神に目覚めた日本政府は、最初の冒険として件の船を購入し、自国の製品を積み込んだ。この船は第一級のイギリス製バーク船、358 トン、ロイズのリストではアーミスティス号と記載されており、前指揮官のリチャードソン船長が所有していた。用材、円材ともに最高のものが使用されており、船室や備品をはじめ、すべての装備はこの大きさの船としては例のないほど見事なものである。商船としては、これより質のよいものは造れなかっただろう。この船は登録トン数の 2 倍を運ぶことができるのだ。2 年近くの間、この船は長崎と上海間を往復して、めざましい成果を収めた。何度か日本を訪れているうちに、リチャードソン船長は多数の日本の役人と知りあい、そのたびに船を絶賛された。予備交渉が始まったのは 1 年ほど前のことで、船を売る意向を打診された。日本側はこの船の航行ごとに税関の台帳を調査して、これまでに上げた利益を計算した。そして、購入を決めると、極めて慎重かつビジネスライクに、価格を確定した。その後、長崎奉行が乗船し、しかるべき検討をすませたのち、日本政府の名義で 3 万 4000 ドルでこの船を購入することに同意した。これはアーミスティス号がイギリス国旗のもとで最後の航海に出航する前のことで、その後日本側に引き渡されたが、復路の料金は日本側が支払った。取引が成立したのち、長崎に住む外国人たちは、政府がこの船を何の目的に使用するのか警戒しながら見守っていた。だが、さほど待つ必要はなかった。間もなく政府は石炭や、海草、雲母、漆器などの代表的な日本の産物をはじめ、中国市場で売れそうなきざまな製品を積み込み始めたのである。積載総量はおよそ 600 トンに上った。この間、数人の高官が江戸から派遣され、船を訪れて、調査結果を大君に報告した。ある高官がこの実験的試みの監督に任命され、ほかの 8 人の下位の役人たちとともに上海へ向かうことになった。船は「1000 年耐える」という意味の千歳丸と命名され、それまでイギリス国旗がはためいていたマストには、日本の国旗が掲げられた。5 月 27 日、さらに 50 人の日本人を乗せて、上海に向かって出航した。下級役人とその部下や従者のほか、航海術を観察し、船の操縦を習うために日本人の船員と海軍士官が乗船した。リチャードソン船長は長崎奉行に船を売ったとき、最初の航海では自分の乗組員に操縦させ、自分が指揮をとることを絶対条件としていた。こうして、この経験豊富な船長は、日本の国旗を掲げた日本船を指揮した最初のイギリス人となったのである。4 日間の快適な航海ののち、船は無事に上海港に到着し、現在もそこに停泊しているが、その積荷と乗客は大きな関心の的となっている。

イギリス領事、メドハーストは、「不思議な国の不思議な人々」を公式訪問するために千歳丸を訪れたが、日本側は極めて丁寧に領事を迎えた。会見は長時間に及び、非常に興味ある会話が交わされた。日本側は上海の交易に関して、統計にもとづくおびただしい質問を領事に浴びせかけた。上海港の税関の歳入、その徴収が外国人にゆだねられている理由、租界の地価、日本も租

界に土地を購入できるのかなどといった質問に対して、メドハースト領事は最大限の情報を与え、この種のことを知りたい場合は、いつでも相談に乗ろうと答えた。そして、日本船の上海入港および、自分の訪問を北京にいる全権公使に報告しなければならない旨を伝え、彼らの目的が貿易に投機する効果を確認することなのか、あるいは政治的なものなのかと質問した。それに対して日本側は、純粋に交易目的であると強調し、乗組員の一部が上海に残る予定で、再び商品を積んで戻ってくる可能性があるとして述べた。

以上が、日本政府のこの自発的な商業活動に関して目下のところ判明している事実のいくつかの要点である。これはわれわれのこれまでの知識——日本の排外的な専制主義および伝統的な政策——と全く矛盾するものであり、まるで小説の世界のできごとのようにさえ思える。しかし、これは現実にはわれわれの目の前で起こった事件なのだ。この予期せぬ動きが引き起こす影響を追跡することは重大な任務であり、本紙は今後も新たな進展がありしだい、千歳丸が運んできたばかりの日本の交易という苗木の成長を報じる予定である。²⁶

とあるように、ノースチャイナ・ヘラルドの記事は、千歳丸上海来航が従来の徳川幕府の大きな政策変化であることに強い関心を示していたのであった。

千歳丸一行の関心事も貿易以外に情報収集にあり、日比野輝寛は彼の『贅脱録』にその一端を記しているのである。その記述の中に「新報」からとして記された箇所が二カ所ある。次ぎにその部分を抽出してみたい。

先ず、千歳丸上海入港から長崎帰港までの6月2日より8月10日までの時期に刊行されていた『上海新報』で現在見ることができるものを次に一覧表にしてみる。

『上海新報』号数表

号数	発行日	日本暦	西暦 1862年	近代中国史料叢刊 三編第59輯
第45号	壬戌五月二十八日	文久二年五月二十七日	6月24日	1頁
第46号	壬戌五月三十日	文久二年五月二十九日	6月26日	5頁
第47号	壬戌六月初二日	文久二年六月二日	6月28日	9頁
第48号	壬戌六月初五日	文久二年六月五日	7月01日	13頁
第49号	壬戌六月初七日	文久二年六月七日	7月03日	17頁
第50号	壬戌六月初九日	文久二年六月九日	7月05日	21頁
第51号	壬戌六月十二日	文久二年六月十二日	7月08日	25頁
第55号	壬戌六月二十一日	文久二年六月二十一日	7月17日	29頁
第56号	壬戌六月二十三日	文久二年六月二十三日	7月19日	33頁
第57号	壬戌六月二十六日	文久二年六月二十六日	7月22日	37頁
第58号	壬戌六月二十八日	文久二年六月二十八日	7月24日	41頁
第59号	壬戌六月三十日	文久二年六月三十日	7月26日	45頁

²⁶ 『外国新聞に見る日本』第1巻 1851—1873、毎日コミュニケーションズ、1989年9月、186～187頁。

第60号	壬戌七月初三日	文久二年七月三日	7月29日	47頁
第61号	壬戌七月初五日	文久二年七月五日	7月31日	49頁
第62号	壬戌七月初七日	文久二年七月七日	8月02日	51頁
第63号	壬戌七月初十日	文久二年七月十日	8月05日	55頁
第64号	壬戌七月十二日	文久二年七月十二日	8月07日	57頁
第65号	壬戌七月十四日	文久二年七月十四日	8月09日	61頁
第66号	壬戌七月十七日	文久二年七月十七日	8月12日	65頁

以上の19号である。千歳丸が上海に入港した五月六日（1862年6月2日）より五月二十七日（6月23日）までの間に刊行された『上海新報』は現在見ることができない。

納富介次郎の『上海雑記』に、

新文紙ニ、上海ヲ去ル三五里マデ賊匪ノ寄セシコト有リテ、李鴻章屢々往イテ征セシ由、又浦東黄浦ノ東ヲ云フニモ賊起リ、英軍上海ニアルトコロノ清兵ヲ助け伐チテコレヲ破リシ由。コレ五月ノ頃ニシテ我等滞在留中ノコトナリ。²⁷

とあるように、上海に迫る太平天国軍の動向に関する納富のこの記事は「新文紙」に依拠するものであったことは明らかである。ここでの「新文紙」とは所謂新聞紙と考えられる。

日比野輝寛の『贅臈録』上、五月七日の条に、

今日ノ新報ヲ看ルニ、五日ニ南翔ノ百姓賊ヲサケ老ヲタスケ幼ヲタツサヘ上海ニ來ル。ソノ途スガラ露宿シテソノ辛苦言フベカラズ。故ニ法兵四方ニ出デ賊ヲ探ルニ跡ナシ。故ニ師ヲカヘセシヨシ。²⁸

と「新報」からの記事を読み記したものと思われる記述が見受けられる。これは日暦で記された日付であるからここで「今日」とあるから中国暦では五月八日に当たり、『上海新報』であるなら、上に掲げた現存の『上海新報』の刊行状況から見て、壬戌五月初八日に刊行された第35号と考えられる。

この記事を見た日比野輝寛は自己の感想を同記述に続けて、次のように記している。

余大イニ嘆息ス。イカナレバ何故ニ清國ノ兵コレヲサグラザルヤ。國內ノ賊ヲ外夷ニ探ラシムル、何ゾ失策ノ甚シキヤ。²⁹

とあり、太平天国軍の鎮圧に外国の軍隊であるフランス軍が関与していたことを批判しているのである。

『贅臈録』中、五月十四日の条に、

今日ノ新報ヲ看ルニ、西路ノ賊王家寺ノ東鄭家橋ニ至リ南方口撫營ニ至ラントス。故ニ營中数炮ヲハナチ逆戦ス。賊西北ニ退キ村落ヲ焚掠シ未ダトウク退カズ。且頃日常勝軍青浦北門ニ出テ賊

²⁷ 東方学術協会『文久二年上海日記』全国書房、1946年5月、29頁。

²⁸ 『文久二年上海日記』53頁。

²⁹ 『文久二年上海日記』53頁。

ト戦ヒ、勝負未ダ決セズ。青城ノ三面賊ニカコマレ、南門ノミ賊營ナシ。華ノ副將 筆語中ニア
ル華翼綸ノ副將ナリ。松江ニカヘリ、李ノ參將 李鴻章ノ參將ナリ。トハカリ、兵率一千二百名
ヲ撥シ青浦南門ニ札營シ、青松ノ路ヲ通ズ。然ルモ北嶺山・朱家閣ノ軍士ササヘガタキニヨリ、
廣福林・塘橋ニ移リ防守ス。³⁰

とあり、「新報」の記事を見て書き写したと思われる。これはおそらく壬戌年五月十四日付けの『上海新報』第38号でなかったかと思われる。

以上『贅狀録』に見える二件の「新報」の記事に関して現在知られる『上海新報』は五月二十八日付けの第45号以降であって、この『贅狀録』に引用されたと思われる『上海新報』の原文は確認できない。

中牟田倉之助は上海で多くの地図や書籍を購入したが、購入書籍の目録中に、

上海新報 第二号ヨリ五十八号マデ³¹

と見える。明らかに千歳丸一行の中に当時上海で発行されていた『上海新報』を閲読し、購入した者がいたのである。

その入手方法に関しては、千歳丸一行の一人名倉予何人の「海外日録」に、

[五月] 初十日、晴。點耶洋行ニ至リ上海新報数張ヲ得タリ。是ヲ閱スルニ本月初三日、賊匪湖
城ヲ陥レ城將趙氏難ニ殉ス。賊匪上海ニ逼リ近クニヨリ本地ニテ戒嚴スル等ノ事ヲ載セタリ。³²

とあるように、名倉は『上海新報』は點耶洋行で入手していたことが知られる。

點耶洋行とは名倉が同初六日の条に、

午後陪從シテ上陸シ點耶洋行阿蘭陀館ノ名ニ至ル。³³

と記しているように、千歳丸一行が上海に到着後、最初に赴いたオランダ商館であった。幕府の今回の上海渡航の幹旋をしたオランダ商人の関係でオランダ館の點耶洋行に行ったのであった。點耶洋行は T.Kroes & Co. のことで、North-China Herald, No. 619 の入港記録に千歳丸の荷主覽に “Consignees T. Kroes and Co.” とある。春名氏によれば、クルース T. Kroes は點耶洋行、T.Kroes & Co. の経営者でオランダ領事を兼ねていた。同商館はフランス租界のあるバンドにあった。³⁴

このように、千歳丸一行の重要な情報源であった『上海新報』の入手先はオランダ商館の點耶洋行であった。名倉はさらに、同十三日の条に、

十三日、晴。午前點耶洋行ニ至ル。李溟南本行幹事ノ人、余ニ本日ノ新報ヲ贈レリ。是ヲ閱スル

³⁰ 『文久二年上海日記』 68 頁。

³¹ 『中牟田倉之助傳』 254 頁。

³² 小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第11巻、ゆまに書房、1997年10月、103頁。

³³ 『幕末明治中国見聞録集成』第11巻、99頁。

³⁴ 春名徹「中牟田倉之助の上海体験—『文久2年上海行日記』を中心に—」73頁。

が行われていたことがあったためである。

この記事中にも見える道台であった呉煦について述べてみたい。上海道台については外山軍治氏の「上海道臺吳健彰」⁴¹があるが、上海道台は上海の対外開港以降重要な職となっていた。

呉煦が、上海道台にあった時期については、光緒『松江府續志』巻二十、職官表、監司表、分巡蘇松太兵備道に、咸豐九年（1859）より同治元年（1862）まで呉煦が就任していたことが知られる。⁴²さらに同書、巻二十一、名宦傳によれば、

呉煦、字曉、仁和人。咸豐九年、任蘇松太兵備道。十年兼署布政使、粵匪陷郡城、煦識美利堅廢將華爾才、令統勇復之。華爾才美利堅紐約人、嘗為其國武弁。咸豐十年、至上海。吳煦為請於巡撫薛煥、令隨官軍剿賊、兩克郡城。（中略）旋賊犯上海、煦習於夷、說以利害、令助順益、調西兵擊賊、賊遁。明年、浦南復警。煦與蘇紳顧文彬・潘曾瑋、乞援於總督曾文正公。復籌餉具輪船、濟師滬防、以固諸城、以次克復、實為東南一大轉機、卒後、郡人專祠崇祀。⁴³

とあるように、呉煦は太平天国軍が上海に迫った咸豐十年（1860）にアメリカ人華爾ウオード Ward の助力を得た。これが欧米人により組織された中国義勇軍とされる所謂常勝軍であった。その後、中国人により部隊を組織してウオード戦死後は、イギリス人ゴードン Gordon が指揮して 1864 年の解散まで続いたのである。

呉煦は浙江省杭州府仁和縣の人であった。呉煦に関する詳細な資料が南京の太平天国歴史博物館より刊行されている。⁴⁴しかし、現存の档案には千歳丸関係の記事は見られない。

その後『上海新報』に千歳丸一行に関する直接記事は無いが、『上海新報』第 62 号、壬戌年七月初七日（1862 年 8 月 2 日）の第一面に「日本貨價單」の記事が掲載されている。

千歳丸が上海を出港したのは七月五日（7 月 31 日）であるから、これは千歳丸の上海帰帆直後のものである。その記事（図 4 参照）に、

第五等陳茶、每担一元至三元。第四等陳茶、每担四元至六元。第三等陳茶、每担十四元至十六元。第二等陳茶、每担十四元至十六元。第一等陳茶、每担十八元至二十五元。第三等新茶、每担十九員至廿六員。第二等新茶、每担廿六員至廿九員。第一等新茶、每担三十員至三十一員。樹膠、每担十三員半至十四員。菜子、每担二員一角五分至二員二角。菜油、每担六員四角至六員半。乾魚、每担四員。剖開海帶、每担三員至三員半。整海帶、每担一員八角至二員半。棕、每担一員半至三員。乾蝦米、每担七員。鐵每担三員二角。棒香、每担廿五員至廿六員。茯苓、每担一員半至二員。銅條、每担十八員半至十八員七角五分。銅絲、每担廿員至廿一員。烟、每担三員半至四員半。鉛、每担十一員十二員。煤炭、每噸六員半至七員。土參、每斤二員半至三員。麥粉、每担二員三角至

⁴¹ 外山軍治「上海道臺吳健彰」『學海』第 1 巻第 7 号、1944 年 12 月、45～54 頁。

⁴² 「中国地方志集成」上海府縣志輯③、上海書店等、490 頁。

⁴³ 上海府縣志輯③、525 頁。

⁴⁴ 太平天国歴史博物館編『吳煦档案選編』第一輯～第七輯、江蘇人民出版社、1983 年 2 月～1984 年 5 月。

『籌辦夷務始末』卷七十七、同治九年庚午九月丁亥（二十四日、1870年10月18日）の条に、

恭親王等又奏、九月十八日、准軍機處鈔出署三口通商大臣成林奏、日本差官到津各情形一摺。奉旨、該衙門知道、欽此。查日本國於同治元年、即搭座荷蘭商船、來上海貿易、藉口中國商人、曾在該國採辦銅斤、欲援上海無約小國章程、在滬通商、設領事官。⁵⁴

とある。同治九年は日本の明治三年に当たるが、明治政府による中国との通商交渉の際に過去の事例として、同治元年の事例があげられ、オランダの助力により、徳川幕府が上海での通商交渉を行ったことが知られていた。また、

『曾國藩全集』奏稿十二、同治十二年正月十二日付けの「予籌日本修約片」に⁵⁵

再、日本通商一案、欽奉九年閏十月二十六日寄諭、（中略）臣（曾國藩）窃思、…同治元年、始有日本官員以商船抵滬、憑荷蘭國商人報關進口、其後疊次來滬。中國隨宜拒卻。始而准其售貨完稅、仍不得在上海買帶回貨。繼而准其在上海一口貿易居住、仍不准駛入長江別口。

とあり、同奏摺は、『籌辦夷務始末』卷八十、同治十年辛未正月己酉（十九日、1871年3月9日）の条に、

大學士兩江總督曾國藩奏、日本通商一案、（中略）臣（曾國藩）窃思、…同治元年、始有日本官員以商船抵滬、（以下略）⁵⁶

とある。この曾國藩の奏摺の内容は、同治元年即ち文久二年の徳川幕府官船千歳丸の上海来航はオランダを通じて中国に通商を求めたことであった。

これらの例からも中国側の官吏には認識されていたのである。

明治初期の駐日公使何如璋に随行した黄遵憲が、光緒十六年（明治23、1890）に刊行した『日本國志』卷六、鄰交志上三、華夏、明治の日中関係に関する記事の中に文久二年の千歳丸上海寄港に関する記述が見られる。

同治元年、長崎奉行遣僚屬附和蘭船、攜貨至上海、因和蘭領事、謁上海道吳煦、請曰、日本向祇與荷蘭通商。自英・法諸國挾以兵威、逼令立約、利權盡為西商佔盡、無如力不能制、未能拒絕。我官民等會商僉、謂若自行販貨、分赴各國貿易、或可稍分、西商之勢。今既到上海、願做照西洋無約各小國之例、不敢請立和約、惟求專來上海一處貿易、并設領事官、照料完稅諸事。通商大臣薛煥允其暫由荷蘭商人報關驗貨、尚未許其購貨。商人歸時、又請尚允通商、乞諭知和蘭領事轉達、將來或遣公使齎求。⁵⁷

とあり、同治元年に長崎奉行がオランダ船に貨物を積載させ上海に赴かせ、オランダ領事を通じて上海道台の吳煦と会見し、通商を求めた。そこでの要望は清朝と条約を締結せず上海で貿易を行いたい

⁵⁴ 『籌辦夷務始末』（七）同治朝、台聯國風出版社、1784頁下。

⁵⁵ 『曾國藩全集』奏稿十二、岳麓書社、1994年12月、7204～7205頁。

⁵⁶ 『籌辦夷務始末』（七）1846頁下。

⁵⁷ 王寶平主編、晚清東遊日記彙編『日本國志』上海古籍出版社、2001年、2月、72頁。

こと、領事を置きたいことであった。三口通商大臣の薛煥はしばらくオランダ商人を通じて貿易を行う方法を提案したとある。姚錫光の『東方兵事紀略』の千歳丸上海寄港に関する部分は、この黄遵憲の記事をもとに記しているようである。

この官船千歳丸一行と上海道台吳煦との会見の内容に関して、中牟田倉之助の「上海行日記」によって中村孝也氏は、幕府の官吏が、

曩に和蘭領事を以て申入れ置きたる通り、此度當地に商人を差遣するに付、取締のため一同渡航したり。滞在中の懇情を所望す。加之聊か貨物を積み来りたれば、運上所に、然るべく注意を與へられたりしと。千歳丸の積載貨物は石炭二十五萬斤、人參五千斤、煎海鼠・乾鮑・干藻・昆布・塗物等を重なるものとす。⁵⁸

と述べたとされる。

高杉晋作の「遊清五録」の「内情探索録」には、

五月八日、於庁堂道臺へ應接。

根立助七郎、沼間平六郎、金子兵吉、鍋田三郎右衛門、中山右門太、中村良平、鹽澤彦次郎、犬塚鏖三郎、英蘭通、岩瀬彌四郎、唐通、周恒十郎、蔡善太郎。

一兼而和蘭コンシユルを以申入置候通、此度當地へ商人さし渡候に付、右取締かたかた、為一見罷越、此程到着したし候に付、逗留中萬端御世話可相成候間、宜被含置候様致度、且荷物も聊積越候間、運上所手数にも相成候間、可然聲掛之儀頼入候。⁵⁹

と、日暦五月八日に千歳丸一行の幕府官吏等が上海道台に謁見した。今回の上海来航の目的を述べたのであるが、既にオランダ領事を通じて要望を申し入れていた。彼等幕府官吏が同行してきたのは取締のためであることと。千歳丸積載貨物の円滑な取引を求めている。

これに対する吳煦の返答が「内情探索録」に見える。

一、其儀者阿蘭コンシユルより委細承り、尤當地之商人官銅調達之ため貴國へ渡海通商之儀、古來より連續致來候得共、貴國之當地へ渡來通商被遊候振合無之候間、貴國より通商之条約相濟候迄者、阿蘭通商之規則に應し、萬端コンシユルに御任せ、彼方之荷物に属し、商賣被致可然存候。⁶⁰

とあるように、この通りであれば、吳煦は日本の来航し対して、これまで中国商人が日本銅の調達のために日本へ渡航していたが、日本から直接中国に来航し通商したことはなかった。そこで清朝と日本が通商条約を締結するまではオランダと清朝との通商条約に依拠して、オランダ国の貨物として取り扱いたい旨を伝え、全てオランダ領事に任せ貿易を行うように提言している。

この「内情探索録」の記述は、先に引用した管見の中国側資料の記述とほぼ一致していると言える

⁵⁸ 『中牟田倉之助傳』221～222頁。

⁵⁹ 『東行先生遺文』下巻、100～101頁。

⁶⁰ 『東行先生遺文』101頁。

であろう。

四 小 結

上述のように、徳川幕府が文久二年四月二十九日（1862年5月27日）に上海に向けて派遣した千歳丸のことは、当時上海で刊行されていた新聞『上海新報』の1862年6月24日発行の第45号に明確に記録されていた。

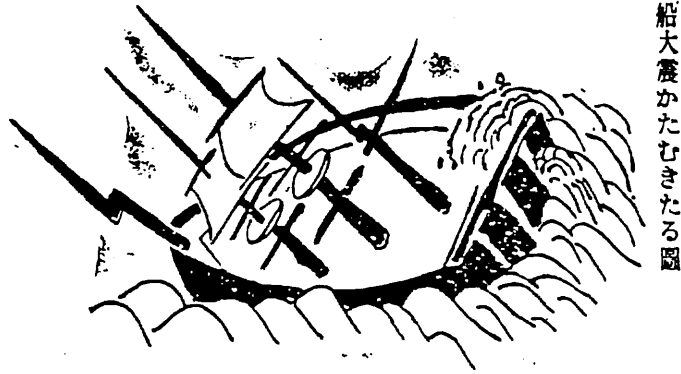
他方、千歳丸に乗船して上海に渡航した一行の中には、この『上海新報』を中国事情の重要な情報源として収集していたのである。

長きにわたり「鎖国」政策を取っていた徳川幕府が通商の目的とは言え、積極的に上海に官船を派遣したことは、上海に居住していた英国を初めとする外国商人にとっても新たな商業機会が拡大するとの思惑もあり好評で迎えられた。このことは清国にとってもその点は同様であったと思われる。その一端は先に引用した『清朝續文獻通考』、『籌辦夷務始末』等の中国側の資料に見られる記述に、取って条約交渉をせずともしばらくの間は、清朝と条約締結のあるオランダを通じて通商を許可する方法を取ったことから知られよう。

これまで、千歳丸の上海来航に関しては、主に千歳丸乗員の日本人側の資料を中心に論じられてきたが、若干の事例であったが千歳丸上海来航に関して中国側の記録を掲げてみた。今後さらに中国側の資料の発掘によって新たな研究視点が開拓されるのであるまいか。このことは先にペリー日本来航に関して、香港で発行されていた新聞『遐邇貫珍』の記事から分析した場合⁶¹と同様に、清代中国人や東アジアに駐在するイギリスを初めとする外国人が、日本の動向をどのように冷徹に見ていたのかを分析する必要があるだろう。

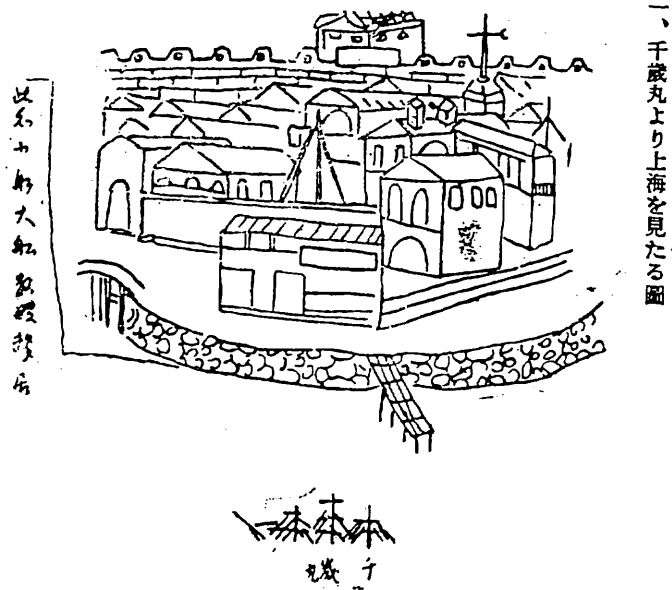
【附記】「本研究は、平成14年度関西大学学部共同研究費によって行った。」

⁶¹ 松浦章『『遐邇貫珍』に見るペリー日本来航—羅森『日本日記』前史—』『関西大学東西学術研究所創立五十周年記念論文集』関西大学東西学術研究所、2001年10月、393～411頁。



御船大震かたむきたる圖

(1) 千歳丸航海図（出典：『幕末明治中国見聞録集成』第11巻、52頁）



一、千歳丸より上海を見たる圖

(2) 千歳丸より見た上海（出典：『幕末明治中国見聞録集成』第11巻、69頁）

